



N P O 法 人  
ほっかいどう学  
推 進 フォーラム



理事長

新保 元康 (しんぼ もとやす)

1958年小樽市出身。82年北海道教育大学札幌分校卒業。小学校勤務とともに、北海道社会科教育連盟や北海道雪プロジェクト等に長年参画し、地域教材を多数開発。また文部科学省の情報化推進事業の各種委員も歴任。2019年屯田小学校長を定年退職。8月からNPO理事長として活動を本格化。

# 世界につながる空知の魅力と それを支えるもの

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

令和2年1月25日、岩見沢市にて約120名の参加者を迎え、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムは、ほっかいどう学連続セミナー「第1回空知の魅力再発見～世界につながる空知の魅力とそれを支えるもの～」を開催しました。来賓に石塚宗司氏（国土交通省北海道開発局開発監理部次長、当時）、竹林亨氏（北海道教育庁空知教育局局長、当時）を迎え、空知の魅力をテーマとした4つの講演とパネルディスカッションが行われました。同セミナーの目的は道内各地の魅力とそれを支える人々の奮闘を再発見することにあります。もう一つの狙いに、地域のネットワークづくりがあります。それは北海道の魅力や地理、歴史、文化、産業まで多岐にわたる「ほっかいどう学」を幅広い層へ推進するには、業種、業界を超えた連携が不可欠だからです。とりわけ学校関係者の参画は欠かせません。呼びかけの結果、当日は社会資本整備の関係者と学校関係者が一堂に会する稀有な機会となりました。本稿では同セミナーの開催概要を報告します。

## セッション1：

### 地域の歴史を知ることが、誇りを取り戻すこと

平野義文氏（岩見沢市議会議員・北海道「炭鉄港」市町村議員連盟会長）の講演は明治期の空知の鉄道、炭鉱の歴史にスポットを当てたものです。「目で見えるものを通し、更に何が見える？」という見出しとともにJR岩見沢駅北側の古びた赤レンガ建造物の写真



**平野 義文 氏**  
(岩見沢市議会議員・北海道「炭鉄港」市町村議員連盟会長)

が映し出されました。話は明治22年に遡ります。当時資金不足に喘ぎながらも北海道開拓が急務だった明治政府に対して、道庁理事官だった堀基を中心とする薩摩閥の要人らが発起人となり、皇族や実業家の投資も集め、鉄道と炭鉱を担う北海道炭礦鉄道会社（以下、「北炭」）が設立されました。

北炭は一時期本社を岩見沢に置き、膨大な資本力と政治力を背景に、エネルギー供給と物流を中心とした最先端企業として、日本の近代化を牽引する存在となりました。写真は、この北炭が建設した幌内鉄道の工場です。地域に対する自信が失われている今こそ、歴史を学ぶ必要があります。



### セッション2：

#### 「ぶどう」づくりを新しい空知の文化、産業の景色に

続いて、山崎太地氏（有限会社山崎ワイナリー栽培責任者・空知シーニックバイウエイ体感未来道副代表）から、空知の風土を活かしたワイン造りの魅力と新しい産業としての可能性が提言されました。広大な稲作地帯が広がる空知に今、「ブドウ畑」という新しい産業の景色が生まれつつあるといます。山崎ワイナリーはその景色のさきがけとなった企業です。2002年

から三笠市の自社でブドウ栽培から醸造、販売までを行うドメヌスタイルのワイン造りを行っています。収穫年を見れば、当時の気候が思い出され、朝陽を浴びたワイン、夕陽を浴びたワインとでは、同じ品種でも明確な味の違いがあるというほど、生産地の特徴が味に反映されるのがワイン造りの魅力であり、難しさでもあるといます。先人の努力による土地改良を継続し、空知ならではのワイン造りを新たな文化、産業として根付かせたいという力強いメッセージが発信されました。



**山崎 太地 氏**  
(有限会社山崎ワイナリー栽培責任者・空知シーニックバイウエイ体感未来道副代表)



### セッション3：

#### 先人の営み・技術力が結集している奇跡の土地、空知

続いて、北室かず子氏（ノンフィクションライター）から、空知の治水事業に取組んだ先人の偉業とインフラ技術の魅力が紹介されました。先人とは1898年の石狩川の大水害を機に始まった空知の治水計画を牽引した北海道庁の技師、岡崎文吉を指します。岡崎が考案した「岡崎式マットレス」と称される護岸工法は、当時、隆盛を誇ったアメリカにおいてミシシッピ川の護岸工事に採用されるなど、世界に認められる技術でした。流量計算の精度も驚くべきもので、1904年の洪水をもとに



北室 かず子 氏  
(ノンフィクションライター)

岡崎が算出した数値は70年間も石狩川の治水事業の指標として採用され続けたといえます。その後洪水は減ったものの、泥炭地盤を改良すべく、<sup>あんきよ</sup>暗渠排水などを駆使し、農業専用では日本最長の北海幹線用水路の整備もして、ようやく現在の豊かな耕作地帯が生まれました。空知には先人の営為と技術力が結集していま

す。空知の豊かな大地は決して「所与」ではなく、先人の努力によって勝ち取られたものなのです。



#### セッション4：

#### 先人の道づくりの苦難の歴史を学び、技術開発の継続を

最後は、佐々木克典氏(国土交通省北海道開発局札幌開発建設部特定道路事業対策官、当時)から、空知の道路開発の歴史と土木技術が紹介されました。空知地域は国内でも類を見ない泥炭地で、国道9路線のうち、道央圏と道北圏を結ぶ物流並びに観光ルートとして重要な役割を担う国道12号、275号は、泥炭地盤上



佐々木 克典 氏  
(国土交通省北海道開発局札幌開発建設部特定道路事業対策官)

を通っています。泥炭地盤には沈下しやすく、支える力が弱いため盛土が破壊されてしまうなどの特性があります。「石狩治水史」から当時を伝える先人の声が紹介されました。「(中略) 深さ10m以上もある泥炭地帯では6kmの間何度レベリングしても狂いがあまりに大きすぎ、途中に10m以上の杭を打ち込んで仮ベンチマークを設け…」空知では泥炭地盤を改良すべく、戦前から現在まで様々な工法の技術開発が進められているといえます。空知の道路開発の苦難の歴史を学ぶことは、技術開発の重要性を継承することにも通じます。

#### パネルディスカッション：

#### 「まだまだ眠る空知の宝 子供に教えたのはこれだ」

続いて、セッション登壇者に加え間嶋勉氏(長沼町教育委員会教育長)を迎えてパネルディスカッションが行われました。参加者の小学校教員からは「今日の講演はどれも授業にしてみたいと思った。中でもすぐに実践できる題材は治水、泥炭。ワインも非常に面白く、空知の未来をつくっていくという意味で、明るい授業にできるのではないかと思う」という声上がるなど、ほっかいどう学推進に向けた手ごたえが感じられました。一方で、教員の忙しさや教材化の難しさなどの課題も報告され、地域と学校、行政をつなぐ当法人の役割が改めて確認される機会となりました。

#### おわりに

「空知」という地域一つ切り取っても、ここで紹介したような豊かな歴史と魅力があります。しかし、残念ながら教育関係者も含め、多くの方はこれを知りません。ほっかいどう学の役割はこうした各地に眠る「物語」を発掘し、地域の人と人をつなぎ、伝え、北海道の未来の芽を育てていくことにあります。

\*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。

<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>